

嬉泉の新聞

嬉泉の新聞／第9号／1988年（昭和63年）2月10日発行／発行所＝社会福祉法人・嬉泉（東京都世田谷区船橋1-30-9（〒156）TEL 03-426-2323・千葉県君津郡袖ヶ浦町下新田1680（〒299-02）TEL 0438-62-9121）発行人＝石井哲夫／編集人＝友田・明峯・須賀

失ったもの

外林大作

母親の乳房を失って以来、今日まで私の人生は、失って失って、別れ別れてきたもののようです。小学校3年生のとき、私を認めてくれていた女の先生が、あっという間に結婚して上京してしまいました。いつの間にか文通も絶えてしまいました。いまだにあの先生のことが思い出されますが、生きておられるかどうか。名前も知らぬ少女を思い慕い、彼女の家が引越して灯りがつかなくなった夜、目の前は真暗になってしまいました。美声の持主だった彼女は、いまだどこにいらっしゃるのでしょうか。少年の日から青春にかけてキャンプをしたり、ともに遊んだ友人たちとも別れ、もう二度と会うことができなくなってしまいました。初恋（？）の人とも、もう二度と会うことはないでしょう。父も母も、姉も兄も亡くしてしまいました。とうとう四十年の同伴者をも亡くしてしまいました。年を経るごとに、一つ一つ大事なものを亡くして来てしまい、なにが最後まで残るのかと思案しています。

それでも、失意して小説を読むことをおぼえ、それらしいものを書いてみようと思ったりました。少女の心がどんなものかと知りたかったのかもしれませんが。失うたびに人の心を思いやるできるようになったのかもしれませんが。心理学を専攻するようになったのも、亡くなって逝った友人や恋人の心をおし測りたかったせいかもしれません。

学校はいろんな知識を与えようとしていますが、失ったものを取り戻す術をなにも教えてくれませんでしたし、教えようともしていま

せんでしたから、私には学校はなじめないもので、今だったら登校拒否児になっていたにちがいありません。教育者は、はやく両親をなくし、失意をかさね、うつ病の寸前までの人間の悲しみと孤独を経験しつつしておいてもらいたいものと思います。

昨夜、若い時に近所に住んでいた人から電話があり、家内が死去したことを告げました時、その女性の口から思わず、私の人生はもう終わった、という言葉が洩れてきました。いつも往来していたわけでもなく、時たま電話するほどの間柄であっても、別離の淋しさというものを、これほど痛く心に訴える言葉はきいたことがありませんでした。家内が入院の日、萎れた花をみて、可愛そう、可愛そうといいましたが、同じ言葉を電話の女性もくりかえしました。

喪失、別離は残ったものになにをおいてゆくのかよくわかりません。失恋のとき、小説を読み耽り、小説を書こうとしたのと同じように、いままた、なにかを書こうとしています。別れて二度と顔をあわせることができなくなれば、虚空に向って両手をあわせるよりはかにないかもしれません。手を合わせていれば思いがとどくような気持ちにもなってきます。そして、失ったものを思い測り、文字にとどめることが残ったものが果さなければならぬ仕事になって来たようです。夜中になると戸口のベルが鳴り、どこまで書けたかを見に来ているようです。

私の場合、あれこれと失ったものを思い出す訓練をしていたので意識することができる

（4頁下段に続く）

社会福祉施設の職員の専門性が求められて久しいが、昨年の夏頃から、社会福祉士及び介護福祉士に関する資格問題がその法案の国会通過によって具体化されるようになってきた。一つの焦点は、社会福祉士の専門性に関する内容であって、法案に盛り込まれている次の文言についての具体的な中身のことである。すなわち、

社会福祉士は、「社会福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があること又は環境上の理由により日常生活を営むのに支障がある者の福祉に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行う」という者であり、介護福祉士は、

「介護福祉士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、身体上又は精神上の障害があることにより日常生活を営むのに支障がある者につき入浴、排せつ、食事その他の介護を行い、並びにその者及びその介護者に対して介護に関する指導を行う」という者である。これらの資格は、名称独占という資格であって、その肩書が使えるだけで、業務の独占を行うものではない。ただ、この名称を目標として、社会福祉業界が、実際に大きく動きはじめることになること

は、十分予想されることである。

現在すぐに全社会福祉施設の職員が、この資格を目指して動きはじめるというようなことは無いとしても、それぞれの施設が、現在の施設の業務や職制において、これを検討してみることが必要になってくる。

例えば、まず介護福祉士の受験資格は、三年間施設の実務経験を持つ者として、その該当者が多数いるし、順次通信教育などにより社会福祉士の受験資格をもつ者も出てくると思う。そして、その前

施設職員の専門性

石井哲夫

に来年度あたりから、各養成校によって「社会福祉士のための実習」とか「介護福祉士のための実習」とかが始められてくることになるが、これにどのような対応を行っていくべきかというものが問われることになるであろう。

袖ヶ浦のびる学園と袖ヶ浦ひかりの学園は、介護福祉士の実習指定施設の対象種別ではないが、社会福祉士実習の対象施設となり得るものである。従っていわゆる「福祉に関する相談に応じ、助言その他の援助」の内容をつめていかな

ければならなくなるのであろう。

ところで、このような法律に基づく、専門職制度の発足は、当然ながら、社会福祉施設内の職務の二分割が想定されるものである。つまり極言すれば、社会福祉士の「介護しない相談、指導、助言」と「相談、指導、助言しない介護」という業務の二分割である。もちろん、クリアにわけられることが出来るとも思えないが、少なくとも、職員の業務への焦点のあて方と、業務運営の分担が二分割の方向をむかうので、これが政策であ

り、処遇の形態をきめていくことになるのである。

つまり、全体の状況や、ケース管理の視点から施設内処遇の方針や、援助システムを検討し、計画し、評価していく管理業務と、直接処遇を担当していく実践業務との分割が行われるわけで、この専門性の二分割をどう評価したらよいか、今後の状況の推移を見守るしかない。必ずしも施設運営上マインナスとは言いきれるものでもない。

本袖ヶ浦の施設における主任会

のメンバーなどは、前述の「社会福祉士の専門性」がより多く要求されているものと解釈も出来るわけである。

そして、この二方向の専門性は機能的に関連しあう相補的な性質を有していると考えてよからう。施設職員が、役割の分担としてとらえていく時代が迫っているわけで、早晚主任会体制も切換える時機が到来することになるであろう。最後に、これからの専門職制化を想定して、施設職員にのぞまなければならない専門性という視点の整理として次の三点をあげておきたい。この三点をめぐって二分割の論議も深められることになるう。

①従来施設処遇という概念で表現されている処遇内容を直接の接遇方法とケース管理（マネージメント）とに分割出来るかどうか。
②治療教育と称せられる処遇については全て相談援助の中に組み入れてよいかどうか。
③日常生活の治療的な配慮が、介護として他の利用者にも普遍化出来るかどうか。

以上について、私としては、少し考えてみようと思っているわけである。具体的な資料を提供してもらえれば幸いである。

ひかりのタイムス

独立第3号

高等部五組の日々

高原 武

しいの木養護高等部(生徒五三名、教師二名の五学級編成)は、社会的自立をめざし、作業学習などを重視すると共に、豊かな個性の実現を図っています。

のびろ学園から通学している一三名の生徒は、六名の教師と共に、単独に五組をつくっています。授業は、学部全体、学年、学級、班、個別指導と多岐にわたっています。五組としては、音楽、体育、美術が行われ、国語、数学、日常生活に関する基礎的な技能知識は個別やグループ指導で行っています。

学年まとまっただけの指導は、福祉ホーム通学生も一緒に二三名となり、一〇名の教師が担当します。

学習内容は、宿泊訓練に向けての生活単元学習が主なものです。

高等部全体で学習するものには、運動会、しいの木祭(文化祭)などです。

「のびろ」から来る五組の生徒

にとって、一つの戸惑いは集団での活動が多いことです。こうした指導体制をとっている中で、集団の中で、大勢の先生から指導を受ける機会が多くなります。また、これに集団の中で子ども同士の刺激が加わり、多種多様な刺激(経験)を受けています。これを効果的にするため、私達教師は一人一人の子の理解を深め、指導の共通化を図り、その上に立って個々の教師の個性と特技が生きるよう努めています。

しかし、二学期を振り返ると、この刺激を自分のものとしている子、受けきれず戸惑っている子がいることを感じます。前者の場合は、のびろ学園、ご家庭のご協力援助を十分生かして指導できたものと感謝しております。

後者の戸惑っている生徒に対しては、さらに学園と検討を重ね、問題点を一つ一つ克服していききたいと思っています。

のびろ学園から通学している子ども一人一人が、貴重な三年間を

しいの木の高等部で過ごしたことを「良かった」と思い、まわりもそれを誇れるよう、今後も努力してまいります。

(しいの木養護学校高等部教諭)

ことしのいちばん

たのしかったこと

木村 泰武

新幹線にのって大阪京都広島に行きました。あずさではこぶちざわやかみすが東北新幹線では上野まで行きました。ひたちでは高萩に行きました。

こうらくえんプールにも行きました。かみすがのおんせんにもはいました。ていくホテルのプールにもはいました。京都にはけっこんしきに行きました。びょうきでにゅういんもしてさんねんでした。あずさでは東京に行きました。しゃないはんはいのサンドイッチコーヒアアイスジュースビールなどもたのしかったです。しごともたいへんだった。おんせんにもはいつたのしかったです。あつかった。こうらくえんのプールはどうもうるさかった。とびこみはきんしだから。こうらくえんのおばけやしきはこわかったですね。ひとつめこぞうおいわさんなどがいてつやドラキラがた。ていくホテル

去年の思い出

村岡 敦

去年は、いろいろな事がありました。

まず、パン販売についてですが、前年まで杉山先生、そして戸屋先生は、去年一月で、明みね先生に代わった。それから、三月になって、かいせんという、びょう気になってしまった。姉ヶ崎のい者にってもらった。けんびきょうで見たら、虫がいた。だにのーしゅらしい。それから、ぼくは、しばらくあゆみから、自転車指導とうの部屋へうつった。パン販売も中止になった。それであと春休み中に、東京で病院に、二、三回見てもらった。毎日薬を付けて、風呂に入って下さいと言われた。

あと、やけどもした。その時はあつかった。しばらくして水ぶくれになった。これは三週間、い者に行っていくすりを付けたら、直った。

五月から登園できるようになった。メンバーが少し代わった。そ

それからいろいろな行事に参加した。君津とりで行って楽しかった。あとは、バーベキューでやきそばを食べた。ぼんおどり大会にも出ました。それからキャラバン隊にいました。行先は高山、福井、金沢でした。

それから九月にアメリカから、モーリンさんという人が来た。あとパン販売では富士住けん、消防しよに売るようになった。それから十二月にデイズニールランドに行った。とても楽しかった。(終)

山岸裕が選ぶ

87年十大ニュース

- ①中曽根内閣勇退。ご苦労サンでした。自民党単独政権しか知らない世代の竹下氏へバトンタッチ。
- ②背番号30江川卓、余力を残して引退。九年間心ないファンの批判に耐えて、ご苦労サン。ファンとしては、寂しい。
- ③不世出のスタア石原裕次郎死去。戦後の一ページに残る伝説のヒーロー。
- ④国鉄分割JRへ移行。三公社五現業の公共企業体消滅。
- ⑤衣笠氏ルーゲールリックの連続出場世界記録更新を花道に野球界から勇退。

ら勇退。

⑥大韓航空機ナゾの消滅。蜂谷「真一」「真由美」というナゾの人物二人がこの事件でかわわっている。が：正体不明。ミステリー小説のようなナゾの事件だ。事実は小説よりナゾだ。

⑦俵万智ブーム。「サラダ記念日」ベストセラー。この新人類歌人、短歌を現代人に、親しみやすいものへイメージチェンジさせてくれた。

⑧岡本綾子アメリカツアーで「日本人」初の賞金王。女性のタイトルホルダーは、初めて。女性も実力をつけられこれだけの実績と栄光を手にするという事を、男に認識させた。

⑨東芝機械コム違反。この事件：。国際的ルールを知らずに、もうけにニッポンが熱中していると袋叩きに外国からあうという事を教えてくれた。

⑩美少女ブーム。後藤久美子：この少女が、大河ドラマ出演をきっかけに、スターへのし上がったことをきっかけに、アイドル界は美少女へ目を向けた。未熟でカワイく自己主張の強い少女がアイドルになる。女性自己主張の時代、80年代を象徴している。

『総括』

男らしさのヒーロー裕次郎・鶴

田は死んだ。プロらしい野生味のある男、東尾は、トバク事件で叩かれてボロボロ。「男たちが伸び悩み気味。」逆に、女性は、自己主張してのびのびたくましく生きてく。これは、来年も：続くよ：。

金余り、もうかってわが世の春をすこすニッポン。いつかは袋叩きにあう日がやってくる。日本いじめに対するノウハウのとぼしさ：。と、クライイ面を指摘しても何の意味もない。

どこへ行くか分らない不透明な昭和63年を、私も、読者の方々も手さぐりで歩むしか生きるすべはない。

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

東京デイズニー

ランドへ行った

田中 雅也

12月3日木曜日袖ヶ浦ひかりの学園からデイズニールランドへ行きました。この日は、天気が晴天で、安心しました。朝早く出発したので、がちゃと大変なようだった。

デイズニールランドの中へ入ったら、海外旅行をしているみたいだった。いつも、外国の事は、写真やテレビで、建物を見るから、僕はわかる。あと、デイズニール

ドは、万博をコピーしたみたいな所でも有る。

初じめ、汽車に乗ったけれど、風景は、電気じかけの人形の動物が有った。仲尾正先生と見たら、展示物が不思議だと感じた。僕は、仲尾正先生と飯田真奈子さんと三人で、グループをくんだ。デイズニールランドの中を走る消防車は、乗らないで、御ば化屋しきへ変更となった。乗物が全部ただで乗れたのがよかった。けれど当然入場料全部が大人四五〇〇円であった。船やトンネルの中を通る、乗物に乗ったけれど、トンネルの中を通るピーターパンに乗ったのがつかれた。船も狭いから、つかれた。

(袖ヶ浦ひかりの学園在園生)

編集後記

ひかりのタイムズも、独立第3号目。何とか印刷に出して、ホット一息。

今回は、のびろの子どもたちが通っている養護学校の先生のレポートを頂きました。そして、子どもの生活研究所こぐま学園々生の木村君の作文、年も明けたのに、タイミングがやらずれましたが、昨年の十大ニュース、といいろいろもりだくさんです。

どうか、お読みください。

(やまあるき ゆたか)

私たちの

うぶや

須藤福祉センター各事業所からの報告

最近のすこやか学園

金井 玲子

十二月の暖かい日のこと、須賀先生が「すこやかに手紙ですよ。」と真赤な封筒をとどけてくれました。受けとったまさしく、「先生、なんだかへんな手紙だよ。」見ると何やら英語が書いてあります。何と、サンタさんからだったのです。それからが大変。「靴下作らなくちゃあ」（毎年プレゼントを入れてもらう大きな靴下を作っている。）「そうだ、お部屋も飾ろう。」みんなの眼はキラキラと輝いていました。そして、石井先生扮するサンタさんが登場するまでの一週間、いろんなことがありました。プレゼントを入れてもらう自分の靴下を、自分で作る。自分のですから、もう一生懸命です。色画用紙の靴下に、つや紙を貼ってもようをつけている「ぞう組」（二歳児）のまさふみくん、アラアラ紙もおてもベッタベタ。

でもまさふみくんのお顔は、真剣そのもの。思わずたれてしまったよだれも気づかない程。そんな友だちを横目で見ながら積木あそびをしていたゆういちくん。頃合いを見て「やってみる？」と誘ってみる。新しいことに取組むには、その子によってウォーミングアップの時間が必要な時もあるのです。「先生、ここへんになっちゃった」むねゆきくんがそっと声をかけてきました。「くじら組」（三歳児）のむねゆきくんは、真赤なフェルトの靴下の周りをリボンでかがっていたのに、通す所間違えてしまったのです。何とかはどかないで修正できないかと思ったのですが、どうも駄目そう。仕方なくはどくことをむねゆきくんに伝えて、そのあと手伝って二人でやり直そうと思ったのに、「ひとりで行る。」困った時に、人とかかわりの中で自分を立て直して、前進していく。そこには、人への信頼があります。しかも、一人でもう一度挑

戦してみようという気持ち。この世に生を受けてまだ三年余りだというのに、何とけなげなこと、と思ってしまう。

「らいおん組」（四歳児）、「かもしか組」（五歳児）は必死です。なぞって、くじら・ぞう組の部屋には、前の日から、ズラーと出来上がった靴下がぶらさがっているのですから。何時もおしやべりなかもしかの面々も、よくチョロチョロするらいおん組のりょうくんも、話し声一つ立てずにじっとり取組んでいます。特に、かもし



か組は、針に糸を通す所から縫うことまで全部自分でしたのですから、おしゃべりなどしている暇などないといった所。「通った！」一番のりに糸通しができたじんくん。「針の穴、よく見ると通せるよ。」と苦心している友だちにアドバイス。じっと集中することは、とても大切なことを身をもって体験したみんなでした。けんくんは、自分で「今日は十こやる」と決め、三日かけて仕上げました。そして、私たちが喜ばしてくれたのが、りょうくんでした。その一生懸命なこと。そして、縫っていく間に、どんどん腕をあげていくのです。とうとう一日で仕上げてしまったのでした。りょうくんの晴れやかな顔は本当に素敵でした。こんな時、子どもたちの中で生活できる喜びをしみじみと感じます。

そして、こんなにも頑張った大事な靴下が、或る日、全部なくなっていた時の驚き、真先に気がついたのもちゃん。「先生、たいへん、靴下がないよー」泣きそうになったかおるちゃん。でも、サンタさんの置き手紙で、プレゼントを入れるためにもっていったと分って、泣き笑いに変わりました。だから、石井サンタさんから

一人ひとりプレゼントを頂いた子どもたちの喜びは最高のものだったのです。

同じ目的に気持ちを向けて取組んでいる一人ひとりの子どもたちの姿に、本当に大きくなったな！とつくづく感じたのでした。

思えば、かもしか組五人、らいおん組五人、くじら組九人、ぞう組八人という粒揃いでスタートした去年の四月。この小さな子どもたちが、これから生きていくために、今必要なものは何なのか、そして私たち大人がどんな手助けをしたらいいのか、それが私たちの課題で、今も続いています。それは、五歳だからとか、四歳だからとか十束ひとからで論じられる抽象的なものではなく、生活保育の場の中で、一人ひとりの子に具体的にいかかわっていかねければならないことなのだと思います。

(子どもの生活研究所
すこやか学園長)

子研事務室から みたパン販売

島野 雅子

毎週金曜日午後一時頃になると子研の事務室は何となくソワソワしはじめます。コーヒー、お砂糖、クレープは？ 魔法瓶のお湯は？

(休憩用のため) 駐車場は大丈夫？一通り確認した頃、事務室の無線機に「こちらファীগ、嬉泉本部感度ありますか？」という友田先生の声が入ってきます。それから約15分位で子研到着。販売員は最近では山岸君、村岡君、田中君、村田君の四名。手早く玄関前に机を出しパンを並べ、価格表をはり、そして開店、(本当に早くなりました。)

袖ヶ浦を出る時は焼きたてで袋に入れられなかったパンを黙々と袋につめる人、「パン屋ですよー!!」ここへ来るとパンがあるよー!!」と元気よく呼びこみをする人、電卓とつり銭の入った缶をもってスタンバイする人、そして籠に山積みパンを積みあげる人もいます。

一時半にすこやか、二時にめばえ、二時半にこぐま、とそれぞれのお迎えのお母様方が毎週金曜日のパン販売を楽しみにして下さり、たくさんお買上げ下さいます。休憩時間中の職員も変わるがわるやって来ます。時には近所のおばさん、通りがかりの方も買って下さいます。パンの数をかぞえる人、袋につめる人、お金の計算をする人、みんな真剣です。

三時からのこぐまグループに通園されている方達がみえる頃には



パンも残り少なくなり、そしてだいたい三時すぎには全部売切れ、二時間近く閉店していたパン屋さんもこれで閉店です。

黙々と言葉少なに、でも確実に仕事をこなすようになってきた村岡君、声は一番大きく、ア、きょうはパン屋さんの日だ、と研究所中の人に分らせてくれる田中君、ブツブツ何かいいながらもパンの売れゆきを気にし、籠の中のパンが一つでも減ればすぐに補充してくれる村田君、「動くキャッシュレジスター」としてあちこちウロウロしながらも、皆の仕事ぶりをよく観察している兄貴分の山岸君。お店の片づけが終わった後、一人一人と目をあわせて順番に挨拶

(1頁より続く)

のは幸せというよりほかにありません。思い出し、意識する術を知らない多くの子どもたちが、いや大人たちも、うつうつとし、時には荒れ狂っている姿を見るにつけ、なにを失ったのか、親が目の前にいながら、親を失ってしまった子どもたちの心痛を思うと、なにを失ったのかと、改めて問いなおすよりほかにありません。

(法人理事・横浜市立大学名誉教授)

するのが、私の楽しみです。みな「今日のパン販売はこれで終わります」と最敬礼をしてくれます。

「ご苦労様。アッちゃん来週はのびろから来るの、お家から来るの？裕君、まっすぐ帰るの、寄道するの？田中君来週の予定は？やっちゃん今度いつくるの？」等々。皆それぞれ真剣に答えてくれます。

山岸君、村岡君、田中君はそれぞれ自宅へ向かう。そしてやっちゃんを乗せたファীগを袖ヶ浦へと見送って今週のパン販売は終了。事務室は又いつもの事務室に戻ります。あちこちにパンでふくらんだ、黒林君デザインによるあのびろパンの紙袋を残して……。

(子どもの生活研究所事務局)